

2016年9月に開催された International Congress of Orofacial Pain において、口腔顔面痛の新しい潮流について国際的な知見が得られました。今回は、この国際学会における流れを受けて、国内の現状をディスカッションするため、2017年4月29日、30日に口腔顔面痛キャンプ in 京都が関西セミナーハウスで開催され42名の受講者が参加されました。広報委員の山崎先生と野間先生にご協力いただき、2日間にわたる口腔顔面痛キャンプ in 京都の様態をお届けします。

口腔顔面痛キャンプ in 京都ー口腔顔面痛診療の現状ー

参加報告 (4月29日 (土) 午後)

日本大学歯学部口腔診断学講座 野間 昇

口腔顔面痛キャンプ in 京都1日目の午後は、大会長の日本大学歯学部の岩田幸一先生と慶應義塾大学医学部歯科口腔外科学教室の和嶋浩一先生の開会式挨拶から始まった。

最初のセッションは「痛みの診断再考察」のテーマで、和嶋浩一先生座長のもと、高見馬場歯科の松下幸誠先生が「歯科臨床における痛み診断の問題点」について、また九州大学歯科麻酔学分野の坂本英治先生が「口腔顔面痛の臨床診断基準を目指して」について講演された。松下先生は歯科臨床で起こりがちな診断のエラーと根管治療の予後不良例を挙げながら問題点を、坂本先生には、FactSheets に記される神経障害性疼痛



関西セミナーハウス



OFP Camp 会場の風景



講師の福田謙一先生

(PTTN) 筋筋膜痛症(MMP)、持続性特発性顔面痛(PIFP=AO 非定型歯痛)、三叉神経痛の Diagnostic criteria について講演された。質疑応答では会場から「口腔顔面痛診断を均てん化するため FactSheets を用いた疫学調査が今後重要になってくるだろう」とコメントがあった。

続いてのセッションは、「薬物療法の基礎知識」がテーマであった。ここでは日本大学歯学部の今村佳樹先生が座長を務められ、東京歯科大学の福田謙一先生が「口腔顔面痛の診断や治療に必要な臨床検査の基礎知識」のテーマで口腔顔面痛の診断や治療に必要な臨床検査の基本事項について、また東京医科歯科大学の嶋田昌彦先生が「薬物療法のための心電図の基礎知識」のテーマで臨床における記録方法、波形の計測、不整脈の種類や虚血性心疾患の心電図について分かり易く概説された。質疑応答では三叉神経痛で処方されるカルバマゼピン処方前後の血液検査の重要性と三環系抗うつ薬処方後の心電図の重要性について討論された。



講師の嶋田昌彦先生



座長を務められた今村 佳樹 先生

法のための心電図の基礎知識」のテーマで臨床における記録方法、波形の計測、不整脈の種類や虚血性心疾患の心電図について分かり易く概説された。質疑応答では三叉神経痛で処方されるカルバマゼピン処方前後の血液検査の重要性と三環系抗うつ薬処方後の心電図の重要性について討論された。

総合ディスカッション後、夕食を済ませ、懇親会へと移った。懇親会では今村先生の乾杯の挨拶により、和やかなムードで始まり、若手からベテランまでぎっくばらんに OFP の研究、臨床について話し合い、大いに盛り上がった。懇親会は和やかに終了し、二次会へと散開した。



食堂での夕食風景



懇親会風景

口腔顔面痛キャンプ in 京都ー口腔顔面痛診療の現状ー

参加報告 (4月30日(日))

東京医科歯科大学歯学部附属病院 ペインクリニック 山崎陽子



二日目 午前中の講義風景

口腔顔面痛キャンプ in 京都の二日目は、神経障害性疼痛の話題で幕を開けた。座長である日本大学歯学部の岩田幸一先生より、近年の神経障害性疼痛研究の概要を御説明いただいた後、松本歯科大学の金銅英二先生が「顎顔面領域における神経障害性疼痛のメカニズム」について御講演なされた。中枢性脳卒中後疼痛と思われる興味深い一例を呈示され、脳や神経細胞、神経伝達経路などを分かりやすく図示し、分子レベルに至るまで御説明いただいた。続いて日本大学歯学部の野間昇先生より、「神経障害性疼痛の診査・診断とその対応」という内容での御講演があり、国際頭痛分類 (ICDH) 3βの内容を基に、三叉神経痛の中でも典型的三叉神経痛および外傷後三叉神経ニューロパチーを中心に、診断のポイントや薬物療法について臨床的なお話をいただいた。神経障害性疼痛の治療法は未だ模索されていることや、ボトックス注射などの新しい治療法の可能性を知ることができた。日本大学歯学部の篠田雅路先生からは、「バーニングマウス症候群 (基礎的側面から)」という、基礎研究を中心とした御講演をいただいた。篠田先生が呈示された多くの研究成果から、原因がはっきりしなかった BMS に、基礎的根拠が徐々に加わっていると実感した。次に、愛知学院大学歯学部の伊藤幹子先生より「バーニングマウス症候群 (臨床的側面から)」との内容で、臨床研究を中心とした内容をお話いただいた。長年 BMS の治療を行ってきた伊藤先生の論文を軸に、BMS 患者の性格傾向や BMS の疼痛機序の複雑性を知ることができた。



参加者の集合写真



二日目 午後のディスカッション風景

痛の治療、管理（関連痛としての歯痛を含む）」のお話をいただいた。患者教育や自己管理の重要性や、治療法の実際を知ることができた。

ディスカッションでは、筋痛の話題で盛り上がった。痛みはどこで感じるのか？など、筋痛・筋膜炎についても、まだまだ未知の部分が多いことを実感した。最後に九州大学の坂本先生が見せて下さったトリガーポイント注射のエコー動画は、会場中が釘付けになっていた。

今回のキャンプは時間的にも内容的にも濃厚なものであった。口腔顔面痛は、基礎的にも臨床的にも経時的な変化に富んだ領域である。現在のトピックを効率的に吸収できる場として、今後も同様の会が開催されることを期待したい。

昼食を挟み、午後は筋痛・筋膜炎についての講義となった。徳島大学歯学部松香芳三先生に「筋痛・筋膜炎の基礎（関連痛と慢性化のメカニズム）」のお話をいただいた。症例を供覧しながら、関連痛や慢性化の機序について御教示いただいた。続いて大阪大学歯学部石垣尚一先生には「筋痛の臨床的特徴と診査」について、DC/TMD および Okeson の分類を参考にお話しいただいた。さらに、日本大学松戸歯学部小見山道先生に